

大学教育学会課題研究集会

以下では、2007年12月1日（土）～2日（日）に京都市の龍谷大学で行われた、大学教育学会2007年度課題研究集会について報告する。執筆者は次の通り。特別講演（基礎教育センター：永井正洋・北澤武）、シンポジウムⅠ（基礎教育センター：串本剛）、シンポジウムⅡ（システムデザイン学部：福地一）、シンポジウムⅢ（健康福祉学部：福土政広）。

I. 特別講演

「イギリス教養教育の源流を訪ねて—学士課程の理念と構造—」講演者：安原義仁（広島大学）

本講演は、日本の学士課程をどのようにしていくべきか、「学士力」という観点で述べられた。さらに、その示唆を得るために、オックスフォード大学の学士課程の歴史を例にして、説明された。以下、講演内容について記す。

1. オックスフォード大学優等学士学位試験制度の成立とその性格

（一）1800年試験規定と新試験制度

1800年のオックスフォード大学では、レベル別のクラス分けを実施し、学生の成績を公表していた。また、特定学問領域において2、3年の学習を行っていた。その後、1科目3時間の筆記試験を行い、成績を公表していた。

（二）口頭試問から筆記試験へ

成績の公表という条件などから、試験は学生にとって重要な試練となった（不合格の場合は落第）。しかし、このような競争的性格を導入することにより、できる学生にとって、自分をアピールする場となった。

2. 優等学士学位過程の文化・多様化

（一）学士課程の文化・多様化の過程

はじめは、古典学を中心とした学問（共通基礎科

目）の試験のみが行われた。しかし、以下のように、試験実施科目が追加された。

1807年：数学の課程試験が実施される。

1850年：自然科学、法学、近代史の試験が実施される。

1864年：必修条件を撤廃し、種々の学問の試験が実施される。

（二）近代教養教育理念と優等学士学位課程

オックスフォード大学では、幅広さが教養（リベラルエデュケーション）であると認識されていた。

※一般的には、専門の深さが教養教育とされていた。

3. 近代オックスフォード大学の学位制度—学位の種類と構造—

（一）学位の種類と学位取得要件

1892年には教養（アーツ）、音楽、医学、法学、神学の5つの学位を発行していた。また、教養には学士と修士が存在した。学位取得の条件として、1）近くに在住すること、2）学費を支払うこと、3）試験に合格することが挙げられていた。

（二）優等学士学位課程の内容と正確

当時の学報では、古典学（教養）優等試験は最も重要であるとしていた。古典学はギリシア語とラテン語等で構成されていた。

4. 教育と学習の形態

（一）教授・学習組織

優等学士学位課程は、応用科学の分野に設けられた場合でも、あくまで、教養教育（リベラル・エデュケーション）として提供された。

（二）優等学士課程の構想と創設

学生は、様々な分野の教育を受けるが教養学士を授与された。

5. 教養学士学位の性格・特色・意味

(一) 学位の位置づけ

19世紀イギリス、オックスフォード大学では、医学と法学と神学など上級学位の基礎として、教養学士と教養修士が位置づけられていた。

(二) 教養の性格と意味

複合学問領域が近年では、盛んに創出され優等学士学位課程ができています。

6. 現代イギリスの大学・高等教育における教育評価

(質保証)と学問領域別学位水準基標

(一) 教育評価の構造

多種多様な学位ができてしまわぬよう、学問領域別学位水準基標を参考にして魅力があり質の高いカリキュラムをつくる。

(二) 歴史学の学位水準基標

優等学位を終えたときに身に付けているべき水準基標を学会の代表などが作成した。一般的技能も含まれている。これは我が国の学士力のイギリス版である。

II. シンポジウム I

「学士課程教育の再構築」と題されたシンポジウム I では、桜美林大学、新潟大学、大阪経済法科大学の事例紹介の後、中央教育審議会の小委員会委員である神戸大学の川嶋教授等2名からコメントが出され、それらを受けて全体討議となった。

事例紹介では、「専門分野に依拠した学部教育」から「教育目標に基づく学士課程教育」への転換が焦点となり、例えば新潟大学では、「主専攻プログラム化」への手続きとして、期待される学習成果やそれをもたらすための教育方略、さらにプログラム改善のためのPDCAサイクルやFDポリシーを定めた「プログラムシラバス」の作成に着手しているとの報告があった。

全体討議では、「桜美林大学のリベラルアーツ学群という名称はどの様に決めたのか?」、あるいは「新潟大学の改革には学内の抵抗が大きいのではないか?」等の質問が出された。前者については、名称決定の際に高校生を対象とした調査を行ったこと、後者に関しては、「プログラムシラバス」作成の過程で教員間の意識改革を図る、との回答があった。

司会者からは総括として、「学士課程教育」という概念は、日本の大学教育では比較的低新しい発想であり、

「再構築」される以前に「構築」すらされていないとする見解もあるが、紹介された事例は確実に「構築」へと向かっているとの意見が述べられた。

III. シンポジウム II

1. テーマ等

テーマ：理系学士課程教育の充実方策

シンポジスト：鈴木久男（北海道大学） 「入門物理における能動的授業」

小笠原正明（東京農工大） 「基礎教育の改善と分野別FDの展開」

コメンテータ：中島由起子（河合塾） 「高校生・大学生の視点から」

司会者：吉永契一朗（東京農工大）

松岡 正邦（東京農工大）

2. 概要

(1) 秀島先生（桜美林大学 3月まで千葉大学）からのシンポジウム趣旨説明

- ・学生のなかには理系の授業をうけていない者もいる。
- ・理系の科目相互の連携がうまくいっていない。
- ・理系の基礎教育をどうしたら良いか？

(2) 中島由起子（河合塾） 「高校生・大学生の視点から」

大学も偏差値だけでは評価できない状態。大学の教育力、総合的な特色を高校生に伝えている。

① 高校時代にもっと身につけておけばよかった科目

- ・数Ⅲ、数C、物理（力学）が学科をとわず挙げられる。
- ・文系学部なのに数学が必要だった。（経済、経営、商学）
- ・経済系の学生の意見：数学、英語、政治・経済 が大事

② 大学基礎科目への学生の意見

- ・基礎演習科目：1クラスあたり20名強の少人数化進んでいる。先生によって内容が違うという不満を生む理由になっている。共通テキスト利用が進んでいる。

③ 専門科目への学生の意見

- ・基礎科目の知識を専門科目に具体的に 응용していく知識がほしい
- ・理系の専門教育における英語の重要性

大阪大学は1年から修士までの英語教育を一環して実施。ESP (English for specific purpose)

(3) 「入門物理における能動的授業」 鈴木久男 (北海道大学)

- ・クリッカーによる能動的授業：聴衆応答システム Audience Response System
- ・アメリカの授業は、250人から500人の授業もある。多様なキャリア、レベルの聴講者がいる。通常の講義では限界とと思っている。講義では短期的な記憶のみで、思考力の養成には適していない。思考力を止めないと授業についていけない。特に数学、物理で顕著。
- ・米国で1985年から変革。定性的な物理の重要性。公式に代入する力より、みずから考えることを重要にする。
- ・どれだけ知識を伝えたかではなく、学生がどれだけ吸収したかが重要
- ・能動的学習授業：15年ほど前から海外で実践されている。Learner Centered Classroomとも言う。ただ、運用に難あり。よい教員には効果があるが、運用が悪いと講義の方がまし。比較的楽な能動的授業が、クイズ形式の能動的学習授業。アメリカで普及している。
- ・北大での取り組み。平成15年9月 UCバークレー化学 (400人クラス) の視察
- ・学生の理解度をリアルタイムで把握できる。理解できないようであれば違う説明をしてみる。
- ・北大では、2007年4月から運用。280人分を輸入。今は、日本にも代理店ができた。

(4) 「学士課程のカリキュラム改革とFD」 小笠原 正明 (東京農工大)

- ・学士課程の基礎教育は世界的レベルからだいぶ遅れている。
- ・同じ工学部でも日米で性格がことなり、比較は簡単ではない。基礎科目 (数学、物理、化学、生物学、地学) の比較を実施した。
- ・日本では導入段階におけるコースワークが脆弱。卒業研究の指導に教員のエネルギーが集中している。学士課程の欠点を卒業研究あるいは修士研究で行う傾向がある。
- ・東京農工大の教養化学の試み。従来、アウトカムの評価 (ベンチマーク) の欠如があった。レクチャは1時間以内。実験をハンディカム等で学生に示す。

- ・上記のような授業では複数TAの活用が不可欠。
- ・FDは従来教育技術に係わる研修がおもだったが、体系的な教育理論の研修、職業倫理にかかわる研修も重要となっている。

(5) パネルディスカッション

Q クリッカー授業における思考力を探求力につなげる工夫は？

A：問題の作成がキー、難易度の違いなど、多くの問題を用意している。

3. 総合的感想

- (1) 欧米に比べて学部基礎教育に関して日本が遅れているという危機感をもった。ただし、そういった比較を研究課題としているグループもあることは、今後の改善に光を見いだせる。
- (2) 学生中心の講義という発想は新鮮であった。
- (3) 海外では、数百人、場合によっては千人規模のクラスがあると聞き、驚いた。その場合には、従来の教師が知識を学生に一方的に伝授する従来の講義形式では難しく、確かに学生に能動的な行動を促す工夫が必要であろう。

IV. シンポジウムⅢ

シンポジウム「FDのダイナミックス-FDモデルの構築に向けて」は、シンポジスト：絹川正吉 (前ICU大学)、田中每実 (京都大学)、安岡高志 (東海大学)、コメンテータ：鈴木敏之 (文部科学省)、司会：井下 理 (慶応大学)、夏目達也 (名古屋大学) で始まった。

本シンポジウムは、安岡が提唱する工学的経営学的アプローチ (Plan. Do. Check. Act cycle : PDCAサイクル) とそれに対する田中氏が主張する羅生門的アプローチを際立たせることで、あるべき今後のFDモデルについて議論された。

前半は安岡・田中・絹川の3人のシンポジストの講演と鈴木コメンテータ (文部科学省) のコメントであった。

後半は、シンポジスト3人とコメンテータに対する質疑応答であった。しかし、主に安岡・田中の主張に対する白熱した質疑討論が行われた。

安岡氏は、PDCAサイクルを用いたFD改革の有用性について述べた。まず、教育改革を実施するためには、目標の設定が最も大切であり、その目標を達成するために、具体的な目標の設定、共通認識の醸成、評価指標の決定

および基準の設定である。しかし、目標の設定は、その組織に最もあった目標にすることが重要で必ずしも普遍的なものはない。

その中で最も強調していたのは、達成目標に対する共通認識の醸成とそのため工夫の大切さであった。

また、質疑応答の中で、PDCAサイクルは田中の主張する「羅生門的アプローチ」も包含しているもので、FD改革を実施する上で最も優れた手法であると強調された。

田中は、安岡のPDCAサイクルに対して、羅生門的アプローチとして、「ずらし」の導入を主張した。PDCAサイクルでは、大学教員は自他を自発的に物象化するのに対して、その自発的同調を脱し、相互に自律的に研修しあう相互研修の必要性を強調した。そして、単なるPDCAサイクルの導入は教員集団にとって単に負担であり、徒労感・疲労感をもたらすものでしかない。そこで、FDの工学的経営学的モデルを教員集団の日常性に向けて繰り返し「ずらす」を導入することを主張した。

以下の6つを例にあげた。

- ① 日常性の物象化操作に対して→日常性の豊かさの重視へ
- ② 研修の客体としての教員への不信ではなく→研修の主体としての教員への信頼へ
- ③ 教員集団の研修における外的目的への従属ではなく→主体的現実構成の重視へ
- ④ 啓蒙的外在的専門性に対して→ディレッタンディズム（素人の相互性）の重視へ

⑤ 教員としての未成熟の補完という苦役ではなく→喜びに満ちた自己現実の重視へ

⑥ 操作的に捉えられた研修に対して→自主的で偶発性に満ちた相互研修重視へ

このような「ずらし」によって、PDCAサイクルを見直す必要があると述べた。

質疑応答でも、田中はこの原則を主張すると共にFD活動にはローカリティがあり、大学それぞれのFDが存在し、普遍的なものが存在し得ないことを皮肉にも安岡と同様に強調していた。

絹川は、安岡と田中の論点に対して、田中の主張することは理想であり本来の姿である。しかし、それが出来るのはFDに関しての共通理解が有り、環境整備が整っているところで、初めて可能である。現実の多くの大学では、安岡の主張するPDCAサイクルの導入が現実的であると述べた。また、後半の議論でも同様の考えを主張された。

最後に、質疑応答で取り上げられた問題で関心を持ったのは、FD活動に参加しない又は関心のない方をどのように引きつけるか？であった。首都大学東京も同様の問題を抱えており、全国の先進的な大学でさえも苦慮していることに変な安心感を持った。今回の大学教育学会2007年度課題別研究集会に参加して、首都大学東京および学部FD活動を進めて行くにあたり、多くの学びを得ました。それを今後のFD活動に活かしたい。